

紫明抄の源泉

八木 意知 男

鎌倉時代中期に河内家傍系の素寂によって著わされた源氏物語の註釈に『紫明抄』がある。今、仮に、本書の著者素寂の俗名が孝行であれ、保行であれ、河内家の学を承けていることはその序文によって十分察せられるところである。然らば『紫明抄』を考えることは、河内家源氏学を知る一つの足場となることを意味しよう。にもかかわらず、その内容については未だ詳細な研究はなされておらず、全く未知であると言つて過言ではあるまい。

ところで、河内家源氏学には俊成の影響が強いことは、すでに重松信弘博士（『新放源氏物語研究史』五三—五五頁）の述べられているところである。とすれば、河内家傍系に位置する素寂が著わした『紫明抄』中にもその根跡が認められはしないであろうか。斯くの如き見解に立つて、以下『紫明抄』を見て行くことにする。

テキストは玉上琢弥博士編、山本利達氏校訂になる角川書店版を使用し、引用も全て本書による。

重松博士は、主として河内家が俊成校訂の源氏物語を尊重してい

ること、俊成の意見が引用されていることを論拠にされたのであるが、紫明抄が（或は河内家源氏学が）俊成の影響を被っているとするれば、註釈に際して引用した古今集の本文はいかなるものであるかは検討の必要がある。

俊成には、俊成校訂のいくつかの古今集がある。紫明抄に引用された古今集が、俊成本と一致する率が高ければ紫明抄の（或は河内家の）源氏学が俊成の学問の影響を受けることが高いことを裏付けることになる。若し、その事実がなければその影響は軽いこと、或は又別の問題が成り立つ。以下、紫明抄所引古今集について検討してみる。

紫明抄中には総計一八四首の古今歌が引かれている（但し、伊勢物語・大和物語中に存る歌の場合には、脚註に従った）。また、脚註の形で古今歌であることを示したもの九〇首である。しかしながら、この脚註にも次の如き誤りがある。

イ 人しれす身はいそけともとしをへてなそこえさらんあふさかの
せき 古今（四四頁上段）

表 II

	本文 保有数	一致 回数	一致率 %	本文 保有数	一致 回数	一致率 %
私稿本	62	38	61	35	23	65
志香須賀本	131	62	47	57	32	56.1
基俊本	184 (1)	99 (1)	54	91	56	61.6
筋切本	78	44 (1)	56	37	23	62.2
元永本	186	94 (6)	51	89	47 (3)	52.8
唐紙卷子本	29	15 (2)	52	13	7 (1)	53.8
関戸本	46	27 (2)	59	23	16	69.6
雅俗山庄本	184	119	64	90	64	71.1
静嘉堂本	61	45 (2)	74	33	28	84.8
六条家本	182	93 (21)	51	89	53 (7)	59.6
寛親本	123	60 (4)	49	57	33 (1)	57.9
永治本	185	113 (2)	61	89	61	68.5
前田本	183	99 (7)	54	86	55 (3)	64.0
天理本	185	108 (4)	58	90	62 (1)	67.8
後鳥羽院本	126	60 (9)	48	58	30 (6)	51.7
伝寂蓮筆本	56	40 (2)	71	30	25 (1)	83.3
右衛門切	35	20 (2)	58	22	15 (1)	68.1
雅経本	185	107 (11)	58	90	57 (9)	63.3
永暦本	186	134 (7)	72	91	78 (3)	85.7
昭和切	65	48 (2)	74	34	29 (1)	85.3
建久本	183	124 (3)	68	88	66 (1)	75.0
寂恵本	185	141 (3)	76	90	76 (2)	84.4
伊達本	186	143 (1)	77	91	77 (1)	84.8
高野切	55	31 (2)	56	27	17 (1)	63.0

○表中、本文保有数とは、紫明抄引用古今歌の本文を保有する総計である。○表中、一致回数とは、紫明抄引用古今歌と古今集伝本に保有されたる歌とが同一なものとの総計である。但し「は」と「わ」、「え」と「へ」と「ゑ」、「お」と「を」の場合は同一とみなした。又()の数字は校合本文と合致するものである。

表 I

口 白雲のやへたつ山のみねにたにすめはすみぬるよにこそありけ
れ 古今惟喬親王(八〇頁下段)

ハ 白雲のやへたつ山にこもるとも思たちなはたつねさらめや 古
今惟喬親王(一七〇頁上段)

以上三首の中、イは物語(宇治拾遺)一八八三の歌であり、口は小町集一九六七若しくは古今六帖三三八五の歌である。また、ハはいずれの歌集の歌であるのか不明のものである。

やのこ、

イ いのちたに心にかなふ物ならばしにはやすくそあるへかりける
(一三六頁下段)

口 命たに心にかなふ物ならばなにかは人をうらみしもせん (四
三頁上段)

この二首は古今集三三七の歌と思われるが、同一本文であるべきが異っている例である。

今これらを二首の歌と解すならば、紫明抄中における古今歌は総計一八六首、中、脚註の存るもの九一首と言うことになる。

さて次に、紫明抄所引一八六首について古今集諸写本と検討するわけであるが、まずその結果を表示したものを別表Ⅰ・Ⅱに掲げる。

但し、表Ⅰは一八六首の古今歌を、表Ⅱは脚註に古今歌として示されたものをそれ／＼検討したものである。この二表を通じて永曆本・昭和切・建久本の一致率は非常に高く、俊成の影響が強いことを知ることが出来る。しかしそれと共に、静嘉堂本・伝寂蓮筆本・寂恵本・伊達本も高いことを見のがしてはなるまい。そこで個々の場合について見ることにする。

春ことに花のさかりはありなめとあひみん事はいのちなりけり
(一二八頁下段・一三〇頁下段)

この歌古今集九七であるが、傍線部イを雅俗山庄本・静嘉堂本では「にほひ」につくる。また、傍線部ロを筋切本・元永本校・昭和切では「はいのちのみなり」につくり、元永本では、「のいのちのみなり」につくる。更に六条家本では第三句「あるらめと」につくる。従って紫明抄と同一本文を有するのは私稿本・基俊本・六条家本校・永治本・前田本・天理本・伝寂蓮筆本・右衛門切・雅経本・永曆本・昭和切校・建久本・寂恵本・伊達本の諸本である。

萩の露玉にぬかんととればけぬよし見ん人は枝なから見よ

(八二頁下段)

この歌古今集二二二であるが、傍線部イを私稿本は「ぬかんととればおちぬ」につくり、関戸本では「ぬかなむとればけぬ」につくる。更に静嘉堂本では「ぬかんとおればけぬ」につくる。また傍線

部ロを雅経本では「おき」につくる。従って同一本文を有するのは基俊本・筋切本・元永本・雅俗山庄本・六条家本・永治本・前田本・天理本・伝寂蓮筆本・雅経本校・永曆本・昭和切・建久本・寂恵本・伊達本の諸本である。

ぬししらぬかこそにほへれ秋のにたかぬきかけしふちはかま
そも (一四三頁上段・一四九頁上段)

この歌古今集二四一であるが、傍線部静嘉堂本は「かこそにほへれふちはかま」、六条家本・雅経本は「かにこそにほへれ」、永治本・前田本・天理本は「かこそにほへれ」につくる。従って、紫明抄と同一本文を有するのは私稿本・伝公任筆唐紙色紙・基俊本・筋切本・関戸本・六条家本校・永治本・前田本・天理本・伝寂蓮筆本・右衛門切・雅経本校・永曆本・昭和切・建久本・寂恵本・伊達本の諸本である。以上を通じて、仮令静嘉堂本との一致率が高くとも、紫明抄の古今歌引用が静嘉堂本によったものでないことは明らかである。

次に伝寂蓮筆本・寂恵本・伊達本について見ることにする。

あしひきの山たのそをつをのれさへわれをほしといふうればし
きこと 古今 (一一九頁上段)

この歌古今集一〇二七であるが、傍線部元永本は「山たにたてるそほつさへわれほしと云う」につくり、寛親本では「山田ノソヲツツノレサへ我ヲオホシトイフ」、伊達本では「山田のそほつをのれさへ我おほしてふ」に各々つくる。従って、紫明抄と同一本文を有するのは志香須賀本・御家切・基俊本・雅俗山庄本・六条家本・永治

本・前田本・天理本・後鳥羽院本・右衛門切・雅経本・永曆本・建久本・寂恵本である。

ことならはおもはずとやはいひはてぬなそ世中のたまたすぎなる
 古今(二一九頁上段)

この歌古今集一〇三七であるが、傍線部基俊本は「いてやところはをほぬさにして」につくり、元永本・六条家本・後鳥羽院本・建久本では「なとよの中の」、寂恵本では「なとよのなかの」にそれ／＼つくる。従って、紫明抄と同一本文を有するのは寛親本・永治本・前田本・天理本・後鳥羽院本校・右衛門切・雅経本・永曆本・寂恵本校・伊達本である。

いぬかみのとこの山なるいさらかはいさとこたへてわかかなもらすな (五二頁上段・八五頁下段・一六九頁下段)

この歌古今集墨滅歌であるが、傍線部イを基俊本は「いぬかみや」につくる。ロを志香須賀本では「いさやかは」、永曆本・中山切・寂恵本・伊達本では「なとりかは」につくり、ハを志香須賀本・中山切・寂恵本・伊達本では「こたへよ」にそれ／＼つくる。従って、紫明抄と同一本文を有するのは永曆本校のみである。

これらによって、寂恵本・伊達本も紫明抄引用古今歌の底本たる可能性は非常に低くなると言えよう。但し、その一致率の高いことは、いわゆる俊成本と同じく花園左府本の流れをくむものである故と思し、久曾神昇博士は伝寂蓮筆天理図書館蔵本について「昭和切に近い俊成本と見ることが出来る。」(久曾神昇博士著『古今和歌集成立論・研究編』一三一頁。)と述べられ、安倍寂恵所校俊成本

あるいは伊達家旧蔵本についても同系統に属する旨述べておられるところである。また、建久二年本が同じ俊成本でありながら他のそれと比べて一致率が低い点については、同じく久曾神昇博士が「語句にも、他の俊成本に見えない独異本文もある。」(前掲書一三四頁)と述べておられるによれば十分納得のいくところであろう。

以上の考察により、紫明抄はいずれの古今集写本とも一致しない古今歌本文を含有しながらも、俊成本就中永曆本・昭和切とほぼ同じ本文を有する古今集より古今歌を引用していることが出来る。以上の現象は、河内学成立の背後の俊成学の実在を評価しなればならないし、著者素寂もやはり河内学の中に生きていたことを意味するものである。更に、定家本の影響も見えることは、定家流の古今集の権威が確立した鎌倉中期の所産と考えるべきことである。

執筆者紹介

久保田 収 皇学館大学教授

野口 恒 樹 皇学館大学教授

八木 意知 男 皇学館大学大学院学生

神宮文庫蔵古地図目録 (下)

皇学館大学地理研究部編

四、北陸道

◇若狭

若狭国全図 秦光基(写) 弘化三 八・一六〇・六

◇越前

三国通覽輿地路程全図 林子平著 天明五 八・八〇四・一
加賀能登兩州全図(写) 八・一六二・三・一

◇能登

能登国之図 文政二 八・一二六三・一
能登国之図 秦光基(写) 文化九 八・一六二・六
能登国全図 秦光秋(写) 天保十三 八・一六二四・一
能登国全図 秦光基 天保十三 八・一六二五・一

◇越中

越中国全図 秦光基(写) 文化十 八・一六〇・一

◇越後

越後国頸城郡之図 秦光基(写) 文化五 八・一六〇七・一

〔癸未春改〕新瀉細見 青楼堂 文政六 八・一二二五・一

越後国細見図 池田隸籬 天保十三 八・一二六四・一

越後国細見大絵図 池田東籬 天保十三 八・一九九六・一

春日山(上杉謙信居住越後国頸城郡)城郭之図 秦生秋(写) 嘉

永元 五・二七六五・一

越後州一円誌之図 池田東籬 八・七〇六・一

越後之図 八・一五四八・一

越後国全図(写) 八・一六〇二・一

越後国全図(代戎桐板) 八・一六〇三・一

越後国全図第一二三(写)

新瀉県下越後国全図 八・一六一〇・一

◇佐渡

佐渡国全図 源親毅(写) 文化八 八・一六〇五・一

北陸道佐渡国全図 杉原光基(写) 文化九 八・一六〇四

五、山陰道

西国順礼道中絵図 八・六三四・一

但馬・因幡・伯耆・出雲・隱岐・播磨・美作之図 八・一五四九・一

三備・安芸・周防・長門・石見・阿波・讃岐・伊予・土佐・筑後・豊前之図 八・一五五四・一

◇丹波

丹波国大絵図 矢野貞利編 寛政十一 八・七六三・一

丹波国大絵図 矢野貞利編 寛政十一 八・七六四・一

丹波国絵図 矢野貞利著 寛政十一 八・二八〇・一

丹波国大絵図^全 中川藤四郎 寛政十一 八・一七四五・一

丹波国大絵図 寛政十一 八・二〇〇・一

丹波国全図 阮親毅(写) 文政七 八・一七五・一

◇丹後

丹後国輿地圖 秦光基(写) 天保十 八・一五九六・一

丹後国大絵図 池田東籬編 天保十一 八・二八一・一

丹後国大絵図^全 (細見) 池田東籬編 天保十一 八・一六六四・一

◇但馬

但馬国大絵図 植村禹玄編 天明七 八・七六二・一

但馬国大絵図 天明七 八・一二七九・一

但馬国大絵図 前川六左衛門 天明七 八・一七三八・一

但馬国大絵図 前川六左衛門 天明七 八・一七四二・一

但馬国大絵図 筱応道撰 天明七 八・一九九七・一

但馬国全図^完 八・一七四〇・一

但馬国全図 源毅(写) 八・一七四一・一

◇因幡

因幡国之全図 秦光基(写) 文化十二 八・一七三三・一

◇出雲

出雲国図 正徳三(写) 八・七八四・一

出雲国図 寛政十二(写) 八・二〇〇九・一

出雲国図 秦光基(写) 文化九 八・一七四七・一

六、山陽道

◇播磨

播磨国大絵図^全 (播磨国細見図) 山下重政作 寛保二 八・一七四四・一

四四・一

播磨国大絵図 山下重政編 寛延二 八・七六五・一

播磨国大絵図 山下重政編 寛延二 八・七六六・一

播磨国大絵図 寛延二 八・一二八二・一

播磨国大絵図 山下重政著 寛延二 八・二〇〇〇・一

◇美作

美作国全図 源毅(写) 文政八 八・一七四九・一

美作国全図 秦光基(写) 文化九 八・一七四三・一

◇備中

備中国全図 秦光基(写) 天保十三 八・一七四六・一

備中国大絵図 部関牛編・松川半山図 嘉永七 八・七八七・一

◇安芸

安芸弥山細見図 文政十 八・七八二・一

敵島図 明治二十六 八・七八〇・二

敵島御島廻図並御再興大島居図 八・五二五・一

敵島弥山細見之図 八・七八一・一

宮島近辺細見図 盛信芳編 八・七八三・一

◇周防

周防国郡全図 八・七八五・一

◇長門

長門国郡全図 八・七八六・一

七、南海道

◇紀伊

熊野街道図(写) 寛政五 八・一七〇二・一

紀伊国之図 秦光基(写) 文化十二 八・一六八八・一

紀伊和歌山城下之図 御巫清直(写) 天保十二 八・一五八三・一

和歌山之図(写) 八・七四六・一

熊野那智山図 八・七四八・一

紀伊国全図(写) 八・一五七九・一

紀州和歌山図(写) 八・一五八四・一

紀州大野浦図(写) 八・一七〇二・一

◇淡路

淡路国全図(写) 八・一五八〇・一

◇阿波

阿波国全図 秦光基(写) 文政八 八・一六三九・一

阿波国新嶋庄絵図 八・一一八五・一

◇讃岐

讃岐寒川郡小豆島之図(写) 八・一五八二・一

◇土佐

土佐国全図 秦光基(写) 文化十二 八・一五八一・一

八、西海道

九州九カ国之絵図 天明三 八・一六〇九・一

◇筑前

筑前国々郡図 白井浅夫 明治八 八・七九一・五

筑前国之図 八・七九〇・一

筑前肥前壱岐之図 八・一五五五・一

◇筑後

筑後国久留米之図 八・七八九・一

◇豊後

豊後肥後日向大隅之図 八・一五五一・一

豊後浜之市細見絵図 仏寿堂 文化十 八・八〇一・一

豊後国大絵図 大蔵俊政 天保十 八・一六一・一

豊後国大絵図 天保十三 八・二二八三・一

◇肥前

長崎地秘図・肥前国地図(写) 八徳堂主人 延享二 八・一六一三

・一

長崎図 安永七 八・七七七・一

長崎細見図 文化五 八・七九六・一

肥前長岑繪図 源親毅 文化八 八・一六一四・一

長崎県内全図 八・七九四・一

長崎大絵図 八・七九五・一

長崎港明細図 八・七九八・一

長崎附近海上之図 八・七九九・三

対馬之図 八・一五五二・一

対馬国之図 八・一六一二・一

長崎港図 八・一六一八・一

◇肥後

熊本全図 林知英 明治十四 八・七九二・一

◇大隅

大隅八郡図 秦光基 弘化四 八・一六一九・一

薩摩国日向大隅秘図 秦光基 弘化四 八・一六一七・一

薩摩日向大隅国之国 秦光基 弘化四 八・一六二一・一

◇薩摩

薩摩国全図 秦光基 弘化四 八・一六二二・一

鹿児島県全図 伊地知真馨 明治十二 八・七八八・一

薩摩国図 八・一二八四・一

薩摩之図 八・一五五〇・一

◇日向

日向国高千穂図 文化四 八・一九三九・一

宮崎見渡図 八・一九二三・一

九、蝦夷

蝦夷国全図 林子平 天明五 八・八〇五・一

蝦夷国全図 林子平 (図) 箕浦直節 (写) 文化四 八・一五三八・一

重訂・蝦夷図 阮親勲 (写) 文化八 八・一五三九・一

蝦夷島全図 秦光基 (写) 文化十三 八・一七一・一

(改正) 蝦夷全図 守拙堂・豊島静脩 嘉永八・一六六八・一

蝦夷風俗書附地図 (写) 八・六〇八・二

蝦夷島図 (写) 八・八〇六・一

蝦夷国全図 (写) 八・一五三七・一

蝦夷国 (写) 八・一五四〇・一

東西蝦夷山川地理取調図 杉浦竹四郎 八・一五四一・二七

十、日本全域

十、日本全域

日本図 寛文六刊 八・六五五・一

本邦図 天明三刊 八・六五八・一

皇都図 天明七刊 八・四八四

本朝在古沿革図説 坦齋著 文化十二 五・八一・一

海疆之図 自江戸北海道至大阪 秦光基 (写) 文化十二年 八・一七〇二・一

大日本輿地便覽 山崎義故編 天保五刊 八・六四七・二

大日本輿地便覽 山崎義故編 天保五刊 八・六四八・二

国郡全図 青生元宣編 天保八刊 八・六三三・二

大日本輿地便覽 速水松居 天保五刊 八・一六八五・二

大日本輿地便覽 速水松居 天保五刊 八・一六八五・二

- 大日本輿地便覽 山崎義故 天保五刊 八・一九四二・二
改正日本輿地路程全圖 柴野邦彦撰 弘化元刊 八・六二九・一
坤輿國識 算作寬吾著 弘化四刊 八・一一五七・三
新製輿地全圖 弘化刊 八・一〇七二・一
(改正) 日本輿地路程全圖 弘化刊 八・一六三七・一
改正日本輿地程全圖 柴野邦彦撰 安政八刊 八・六二八・一
國夷大全圖 文久三刊 八・七五六・一
大日本海陸全圖 整軒壘圖 文久四刊 八・六三六・一
大日本程路全圖 長久保玄珠著 元治二刊 八・六四二・一
銅鑄大日本國細圖 玄玄堂緣山著 元治二刊 八・六三七・二
銅鑄大日本國細圖 玄玄堂緣山著 元治二刊 八・六三八・二
(銅鑄) 大日本國細圖 元治二刊 八・一六一五・二
(銅鑄) 大日本國細圖 元治二刊 八・一九八七・二
大日本全圖^并朝鮮國全圖 平田敬編 明治二刊 八・六三九・一
(改正) 大日本全圖^并朝鮮全圖^全 平田敬編 明治九 八・一五九
二・一
小学必携日本全圖 高橋不二雄編輯 明治十刊 八・一七二三・一
全國道中独案内圖 三上直助編 明治十二刊 八・六五一・一
大日本帝國新選里程全圖 研直次編 明治十三刊 八・六四〇・一
大日本明細全圖 權井達之助編 明治十九刊 八・六四六・一
大日本帝國駅通區書郵便線路圖 駅通局 明治十九刊 八・一七〇
一・一
中外方輿地圖 岸田吟香著 明治二十七日刊 八・一〇六七・一
大日本歷史地圖 生田目經德著 明治二十八刊 五・八〇・一
- 日本地圖 伊藤政三 明治三十二刊 八・六五七・三三
大日本帝國全圖 日報社編 明治三十四刊 八・六四一・一
日本地圖 龜井忠一 明治三十四刊 八・六五六・一
日本國史地圖(附 日本國史地理) 原秀四郎 明治三十九 五・
二一〇一・一
江戶時代古版地圖集附解說 広島高等師範學校地歴學會編 昭和三
刊 八・一六八・一二
日本古版地圖集成(附錄解說付) 博多成象堂 昭和二十年三月二
十七日 八・一五〇一・一(八十六枚)
大八州巡國圖 木全雄香 五・三九四・一
皇明輿地圖 八・一〇一三・一
坤輿全圖 八・一〇六〇・一
坤輿全圖說 稻垣某 八・一〇六一・一
輿地全圖 八・一〇七一・一
皇都道割圖 八・一五三一・一
大日本國圖 八・一六三六・一
(改版) 日本輿地路程全圖 八・一六三八・一
大日本分國沿革圖 豊臣御武鑑 五・二七六六・一
- 十一、琉球諸島
琉球國全圖 林子平 天明五 八・八〇二・一
琉球中山國圖 八・八〇三・一
琉球諸島之圖 八・一五五三・一
琉球三省三十六島之圖 林子平 八・一六二〇・一

十二、清・朝鮮 (含滿州)

- 朝鮮渡海并国完 (写) 安永 八・一六三二・一
朝鮮国全図 林子平著 天明五刊 八・八〇九・一
清二京十八省全図 東条耕 嘉永元刊 八・一〇三一・一
懷中清国全図 原橋伝次郎編 明治十七刊 八・一〇二九・一
(新・鑄) 支那輿地全図 君林篤三郎編 明治十七刊 八・一六三三・一
三・一
請国北京城全図 窪盛久 明治十八刊 八・一〇三一・一
日清三国詳細地圖 清水常太郎 明治二十七刊 八・六五二・一
日清韓三国地圖 清水常太郎 明治二十七刊 八・六五三・一
日清韓実測地圖 三輪文次郎 明治二十七刊 八・六五四・一
朝鮮地圖 中村芳松編 明治二十七刊 八・八一・一
新撰朝鮮全図 改教国閣制国 明治三十五刊 八・八一〇・一
清韓輿地圖附日本 穂積猛輯 明治三十七刊 八・一〇二八・一
清国大地図 革命動乱地黙註 日報社編 明治四十四刊 八・一〇三〇・一
三・一
朝鮮国図 (写) 八・八〇八・一
朝鮮八道之図 八・八一・一
大清広輿図 長久保玄珠校正 八・一〇三三・一
朝鮮国八道図 (写) 林子平 八・一六三〇・一
朝鮮国図 (写) 八・一六三一・一
清国輿地全図 (写) 八・一六三四・一
大明省図 (写) 八・一〇三五・一

- 東亞古図 (写) 八・一七〇二・一
京釜鐵道線路略図 八・二〇一七・一
滿韓全国附樺太全図 大阪毎日新聞社編 明治四十刊 八・八一三・一
南瞻部洲万国掌粟之図 文憲軒字平 宝永七刊 八・二〇五五・一
(南瞻部洲) 万国掌方之図 宝永 八・一五九一・一
新訂万国全図 高橋景保著 文化七年三日刊 八・二〇四七・一
(嘉永校定東西地球) 万国全図 阿部喜任誌 (大山義信校定) 天保九年 八・一五八八・一
万国全図 阿部喜任編 天保九年 八・一二九一・一
改新正版 万国明細全図 前田常吉著 明治十九刊 八・一〇七〇・一
大明九辺万国人跡路程全図 康熙二刊 八・一〇三四・一
万国集覽之図 (南閣浮提諸国集覽之図) 華坊兵藏 八・一五八五・一
万国総図 八・一五八七・一
万 (外) 国図完 (写) 八・一五八九・一
万国図全 (写) 八・一五九〇・一
禹貢山川総会之図 (写) 八・一〇二七・一
坤輿万国全図 八・一〇六二・一

十三、唐 土

- 唐土歴代州郡沿革地圖 水戸一長赤水先生輿図 寛政元刊 五・三三一九・一

唐土歴代州郡沿革図 長久保赤水 天保六刊 五・一七七六・一
 唐土歴代州郡沿革図 長久保赤水 天保六刊 五・一七七七・一
 唐土歴代州郡沿革図 長久保赤水 安政二年 五・一七七三・一
 唐土歴代州郡沿革図 長久保赤水 安政四年 五・一七七四・一
 唐土歴代州郡沿革図 長久保赤水 安政四刊 五・一七七五・一
 唐土歴代州郡沿革図 二宮燹 安政四刊 五・三二〇一・一
 唐土興地之図(写) 八・一六三五・一

十四、世界

地球全図 可馬峻(江漢)写并刻 寛政四銅版 八・一〇六九・二
 地球万国興地全図 山崎美成 嘉永三刊 八・一九六四・一
 地球掌覽 山本小三郎 明治六年刊 八・二〇四八・一
 暗射世界地図 明治七刊 八・一〇六三・二
 永田氏改正暗射地球図 岡田書林 明治八刊 八・二〇四九・一
 暗射地球図 明治八刊 八・一二二〇・一
 世界大地図 ジョンストン 辰己小次郎 須崎芳三郎訳 明治三十
 五刊 八・一〇六五・一
 世界地図并同索引 亀井忠一編 明治四十二刊 八・一〇六六・二
 欧州古版日本地図集 松本賢一編著 十一組出版部 昭和十八 八
 ・一五〇二・一
 嗚蘭新訳地球全図 橋本直政訳 八・一〇六三・一
 地球図(地球改正図) 写 八・一五八六・一

皇学館大学講演叢書

() 内の数字は頭備。送料各 35円。

- 一、青年学徒に告ぐ 総長 岸信介 (60)
- 二、明治維新百年を迎へて 教授 谷保田取吾 (60)
- 三、神宮の式年遷宮 教授 谷省吾 (60)
- 四、現代の国学 教授 重松信弘 (60)
- 五、日本人と武の道 教授 佐藤通次 (70)
- 六、家庭の祭祀 学長 高原美忠 (80)
- 七、歴史の継承 学問 平泉澄 (60)
- 八、信仰と人生 助教授 岡田重精 (70)
- 九、現代生活と神道 教授 谷省吾 (80)
- 十、東西の間観 教授 野口恒樹 (70)
- 十一、藤田東湖先生を仰ぐ 教授 荒川久寿男 (60)
- 十二、事業経営の道 教授 佐藤通次 (70)
- 十三、孝明天皇 教授 久保田収 (60)
- 十四、西郷隆盛 教授 谷省吾 (60)
- 十五、橋本景岳先生を仰ぐ 教授 三木正太郎 近刊
- 十六、憶良の人と作品 福岡女子 倉野憲司 近刊

発行所 皇学館大学出版部

伊勢市倉田山(郵便番号五一六)
振替口座 名古屋 一六三二六番

講演叢書予約購読者募集中

購読代金千円を添へて御申込みになりますと、御希望の輯より順次十一冊の叢書を、毎回お手許へ直接お送り申し上げます。